「シゼンホゴフェス」

日本を変える一人になる
「シゼンホゴする100万人」キャンペーン

2001年12月
Report

中島朋子さん

シゼンホゴフェストークショー

profile

なかじま・ともこ さん
1971年6月5日生まれ。北海道富良野を舞台にしたテレビドラマ「北の国から」の蛍ちゃん役、映画「ふたり」「TUGUMI」「パラサイトイブ」や舞台などで活躍。2001年春には、エッセイ集「雑草の生活」（新潮社）が発行された。小さなこどもが自然と出会う窓口として、お母さんの存在は大きい!としみじみ感じさせてるすてきなエッセイ集。

北海道で育まれたもの　～大きな自然～

最初に北海道の自然にであったのは7、8才くらいでした。東京から北海道へ行ったので、全て新鮮に感じました。撮影は待ち時間が多いんです。また、自然を荒らさないように撮影していますから、あまり動けない。その中で、一人で待っているとき、虫だとか、リスだとかが出てくる。一人で待つのは寂しいけど、東京で育ったら怖かっただろうクモも、見ていると時間を忘れて‥。しぜんに自然と遊ぶことが身ににつきました。撮影は季節ごとに1ヶ月ぐらい行っています。だから、自然のなまめかしい厳しさとおもしろさを共に味わえました。冬のきれいな景色、その寒さの稟とした感じ。それが溶けていった春。全部味わえたからこそ、その時期にしか味わえない彩りとかにおいとかを尊く感じる。季節ごと全部違うから、全部がいいんですよね。それに、成長と共に感じるものが違う。自然ってすごいなと思うのは、同じ場所でもその時々で新しいものでてくることです。そういう経験が宝物です。

感じるアンテナを磨く　～身近な自然～

北海道の自然は確かに鮮度がいいですね。でも、植木鉢から芽が出てきたときの色。きれいな色をしてて。やはり鮮度を感じるんです。求めると近くにも鮮度のいいものがいっぱいあると思います。

自然を感じるには、感じるアンテナを磨いておく必要があると思います。それとチャンネルを閉じないこと。思春期の時などは自分の頭の中だけに思考が集中するし、そういうときは難しいですけれど、でも、ちょっとチャンネルを変えると見えてきます。家のなかにいても、このサボテンは私に栄養をくれているなあというように。すると、一個一個に命の鮮度がある気がします。3才の子どもとよく近所を散歩しているんですが、子どもはなんにでも興味を持って、質問攻めなんです。
「何で葉っぱが黄色くなるの?」とか。すると、私が興味を持っていないことでも考えなければいけなくなる。「葉が落ちて寂しいね。でも、もう次の葉っぱの赤ちゃんの準備してるんだよ。」と言うと、楽しみになっちゃって‥。「いつ出てくるの?」って。この木が全部生きていて、次にはすごい数の赤ちゃん出来て、そのためにいっぱい空気すって太陽浴びているんだよって思うと‥命いっぱいって感じる。すると、すごく楽しくなる。

「ママ、うれしんで」～子どもと自然かんさつ～

子どもと観察していると、考える癖がつきます。そうなると、自分もボーと口を開けてモノを見てたりするんですよ。子どもがよく、「ママ、うれしんで」と言うんです。「うれしもう」とするメガネをかけると、楽しいですよ。「守らなきゃ」だと眉間にしわが寄った感じでしょう?こんなふうに（目をつり上げて）なっていると、誰にも幸せをあげられないし。自然を「うれしむ」気持ちは、子どもから与えられたり、大きな自然から育くまれました。

「シゼンホゴフェス」とは‥‥

「自然保護って、なあんだこういうことからでよかったんだ」と、自然保護に関心を持ってもらい、身近なものに感じてもらうために開催。コンサートやトークショー、メッセージの展示や映画上映などのさまざまなプログラムを盛り込んだイベント。

2001年12月14日から24日まで、「池袋アムラックス東京」で開催しました。

そして、母からもです。東京で暮らしていたんですが、母はタンポポを当たり前のように食卓に載せていました。東京でも季節の食材があって、季節を楽しんでいたんですね。ただの雑草だったのが、「食べられるんだ～」とかわかると親しみが湧きます。
子どもの経験ってストレートで、とても大切なものだと思います。以前ハワイに行ったときに大きなムカデを見たことがあって、「あ～虫好きを返上しないと…」と思ったくらい怖かった。でも、その時どうして怖いのかなと考えたら、知らないからだと思いました。お母さんが虫を怖がっていたら、子供もそうなってしまうでしょう。私は怖くても子どもに教えられるものがあればいいなと思いました。

モノのルーツ　～子どもと一緒に考える～

いろんなモノのルーツ、根っこを知るのもいいですね。それがあって当たり前っていうのはコワイ。3才には当たり前ではないし、だからこそシンプルで重要な問いかけをしてきます。一緒にどうしてやって来たんだろうと考えると、私もいろんなことがシンプルに見えてきます。例えば、イチゴを一年中あると思っているけど、本当は?とか考える。12月にイチゴって変?って。
素材のルーツを知ると、愛おしくなるし、身近にもなるし、大切にしていける。そして、モノがシンプルに見えてくれば、つじつまの合わないことをやらなくなるのではないでしょうか?

狂牛病とかいっても、生命からかけ離れた過ちのような気がするんです。食べることはサイクルなのに、それが製品になってしまって狂ったように感じます。かれら（牛）が好きなのは新鮮な牧草で、それを食べるという自然のサイクルを意識できればずいぶん違ってきたのでは。自然には自然のルールがあるはずで、ちゃんとそれを心得ていれば一緒に生活できるんじゃないのかな。
自分も小さいけど、生命体のひとつとして意識できていればと思っています。生きものとして循環していることを。また、文明の中でも美しく循環しているものがあります。私はそれらを知っていきたいなと思っています。

シゼンホゴフェスでは、2001年「自然しらべ」に寄せていただいた全作品をパネルにして展示しました。
（高さ2.7m／幅19m）

Event Report

2001年自然しらべから「みんなのひとこと」

- 私の大切な自然は、ホタルの飛び交う水田です。最近は観光客の人たちが、車で大勢来るようになってしまいました。排気ガスとか、ホタルに影響してたら嫌だなあ。あんまり多くの人には知ってほしくないところです。 群馬県／東間未希さん
- 毎日通勤で通る田んぼには、サギ類やキジなど、日によって色々な鳥が見られる。住宅地周辺だが、まだたくさんの鳥が見られることに感動した。 愛知県／藤村深雪さん
- 子供達が自分達の郷土の自然に気づいて、それらを大切にする気持ちを長く持ち続けていけるようになってもらいたいと思います。 千葉県／藤乗一由さん

Report

- 身近な水路がコンクリート化されていきます。こども達の魚捕りの場が失われていますが案外気にも止められません。このことのツケは、いずれどこかであらわれていきそうです。 茨城県／山根幸美さん
- 公園なので、人工的な自然なのかもしれませんが、緑があって、その中で幸せそうに遊んでいる人々がいる、こういう風景がずっと続くといいなあ、と思います。 東京都／佐竹繁春さん
- 我が家の八重桜にからみつき、毎年色鮮やかになるカラスウリ。冬、ヒヨドリがつつきに来る。 埼玉県／鳥居貴代美さん
- いつもみている場所なので四季の移り変わりなどの微妙な変化と自然との調和が心を和ませる。 東京都／春田善之さん